

LEADERS NOW!



明日香村教育委員会

都塚古墳の発掘調査に参加

発掘調査技師目指し、貴重な経験積む

●文学研究科 博士課程前期課程 総合人文学専攻1年次生
上田 裕人 さん / 北嶋 未貴 さん

関西大学の初代考古学担当教授だった故末永雅雄名誉教授は、戦前、石舞台古墳の発掘調査を行った。その後任の故網干善教名誉教授は高松塚古墳の発掘調査を指揮した。どちらの古墳も奈良県明日香村にある考古学史上、重要な遺跡。そして、今年、本学と明日香村教育委員会文化財課が発掘調査を行った都塚古墳が大きな話題だ。この調査には発掘調査技師を目指す2人の大学院生も参加している。

奈良県明日香村の都塚古墳が、関西大学文学部考古学研究室と村教育委員会文化財課の調査によって、国内に例のない階段ピラミッド状の大型方墳である事がこの夏明らかになり、日本中の考古学ファンの関心を集めている。古代史に新しい光を当てたこの発掘調査には、文学部日本史・文化遺産学の米田文孝教授のゼミ生も参加。中でも、中心的な役割を担っているのが、大学院1年次生の上田裕人さんと北嶋未貴さんだ。

本格的な調査が始まった今年5月以降、上田さんと北嶋さんは、授業のない日や夏休みにはほぼ毎日、朝8時半から夕方5時まで現地で調査に携わってきた。

村教育委員会文化財課の職員と共に、遺跡発掘現場の作業員の間で“ガリ”と呼ばれる農具の両刃がまを使って土を削り遺構を掘り出す作業や、掘り出された遺構を測量し、図面を作成して記録に残すなどの作業を担当してきた。彼らの作成した図面は今後の研究の基礎的な資料として活用される事になる。8月16日、約4100人もの考古学ファンが詰め掛けた現地説明会では、案内役も務めた。

「都塚古墳は、1967年に関大が調査した古墳。ほぼ半世紀ぶりの調査に、関大生としてかかわれてうれしいです。授業や本だけでは分からない専門知識や技術を学ぶ事ができるのも発掘現場の醍醐味だと思います」と話す上田さんは兵庫県川西市出身。考古学好きの父に連れられて、小学生のころから地元兵庫県下はもちろん、各地の博物館や遺跡を訪ね、見学会や説明会に参加。明日香村にも何度も訪れた。大学で考古学を専攻したのも自然な流れだった。

北嶋さんが考古学の魅力に目覚めたのは中学生の時。職業体験授業で文化財保護に携わる専門家の話を聞いた時に、土器に触れた体験がきっかけだった。「千年以上も前に作られた物が、今もきれいに残り手に取れる事に感動を覚えました。今もその感動は変わりません。土器を見ていると自然にほほ笑んでしまいます」と笑う。今年3月には、大阪府立弥生文化博物館において、地元・静岡県西部の古墳時代の須恵器生産について発表も行った。

2人は今回の調査以前にも、関西大学がかかわる川原寺裏山遺跡(明日香村)や円満寺山古墳(岐阜県)などの発掘調査に参加し、着実に経験を積んできた。

2人が将来目指すのは、発掘調査技師。「幅広い年代を詳しく知り、広い視点を持った研究者になりたい」(上田さん)「地域に根差した研究者になりたい」(北嶋さん)と、それぞれの意気込みを語った。



上田 裕人—うえだ ゆうと
■1990年兵庫県川西市生まれ。摂津高校(現・早稲田摂津高校)卒。2014年関西大学文学部卒。関西大学大学院博士課程前期課程文学研究科総合人文学専攻1年次生。



北嶋 未貴—きたじま みき
■1991年静岡県浜松市生まれ。聖隷クリストファー高校卒。2014年関西大学文学部卒。関西大学大学院博士課程前期課程文学研究科総合人文学専攻1年次生。

古本ソムリエがご案内 本の世界の尽きない魅力

古本屋巡りがやめられなくなる

●古書善行堂 店主
山本 善行 さん —文学部 1982年卒業—

京都・今出川通りを東へ向かうと、白川通りと交差する少し手前に小さな古書店「古書善行堂」がある。店主は「古本ソムリエ」の異名をもつ山本善行さん。古本屋巡りの日々をつづった著書や本の面白さを紹介する文章も人気の最強古本ハンターだ。



本の魅力にはまったのは高校生のころだった。古書でしか手に入らない本が世の中にはたくさんあると知り、新刊で買うより安いのもあって、おのずと足は古本屋に向かい、やがて古本屋巡りがやめられなくなってしまった。

高校の同級に、現在、古本ライターとして活躍する岡崎武志氏がいた事も大きかった。2人は競うように京阪神の古本屋を巡り、見つけた本、読んだ本を披露し合い、語り合った。

学友にも恵まれ読書の日々を過ごす中、関西大学文学部に入学した。

「大学時代の思い出は円い建物の図書館(現在、関西大学博物館などがある簡文館)で、授業の合間に本を読んでいた事。あそこで『正宗白鳥全集』を第1巻から順に読んだ事が一番の思い出ですね。家内も関大生で教室で隣に座った学生でした。国文学の谷沢永一先生など、文学の研究者の講演はよく聴きに行きました。勉強は教えてもらうのではなく、自分でするものと思っていましたね」と振り返る。

学生生活の最後の年には、わざわざ京都に部屋を借りて通学した。もちろん、古本屋巡りをするためだ。卒業後は学習塾で中学生を教えた。職場は東大阪市だったが、京都に住み続け、片道2時間近くかけて通った。

「昼間に文章を書いたり、職場まで行く途中で古本屋を回ったり、ジャズ喫茶に入ったりしたかったから、仕事が夕方から始まる塾講師を選びました。仕事を終えて京都に戻ると深夜0時を過ぎることもありましたが、身体を清めるつもりで午前2時まで開いている古本屋をのぞいてから帰ったり。僕はこれを「古本浴」と呼んでいました」

古本に憑かれたような当時の様子は、著書『関西赤貧古本道』や『古本泣き笑い日記』に詳しい。

2004年に上梓された前者には「私の場合、本は売る程あっても、しかも毎日古本屋に通っていても、古本屋になりたいとは思わない」という一節があるのだが、山本さんは2009年、集めた本を元に古書善行堂を開店し、古本の売り手に転じた。



山本 善行—やまもと よしゆき
■古書善行堂店主。1956年大阪府生まれ。74年大阪府立守口高校(現・芦屋高校)卒。82年関西大学文学部卒。塾経営などを終えて2009年古書善行堂を開店。著書に『古本泣き笑い日記』(青弓社)、『関西赤貧古本道』(新潮新書)、『定本 古本泣き笑い日記』(みすのわ出版)。撰者として上林曉傑作小説集『星を撒いた街』(夏葉社)などがある。

「買い手を何十年もやってきて、よく頑張ったと自分を褒めてやりたいような達成感があり、次の人生として、本を読む楽しさ、買う楽しさ、集める楽しさを若い人に伝えたいという気持ちが生まれてきたのです。仕事を辞めて店を始めると言ったら、普通家族は不安に思うものだけれど、家から本が減ると、全く反対されませんでした。家の中は積み上げた本の山でテレビ画面が隠れたりしていたので、理解のあった家内もさすがに何とかしてほしいと口にする程の状態でしたから」

古書善行堂には学生から年配の方まで幅広い客が訪れる。古本屋は初めてという女性もいる。京都という土地柄か遠方からの来店者も少なくない。古書店の接客としては珍しく、山本さんはよく客に声をかけると言う。

「何回もご来店いただくと、その方の好みが分かってくる。常連のお客さんから『元気になる本を選んで』という電話があって、次の来店までにその人のこれまでに買った本や読んだ本から考えて、数冊選んで用意したこともある」と話す山本さんは、「古本ソムリエ」とも呼ばれる。最近では、上林曉、黒島伝治など、今では手に入りにくくなった作家の名作を、山本さんがセレクトしてまとめた傑作選も出版社から発行された。

「まだまだ知らない本がたくさんあって、驚きや発見の日々です。知識が増えれば増える程に楽しみが広がるのが本の世界」と話す山本さんは、売る側になってからも、やはり古本屋巡りを続けている。どこまでも広がる本の世界。その魅力に触れてみたいになったら、「古本ソムリエ」に相談するのも良いかもしれない。